

### 第3回泉佐野丘陵緑地運営会議

日時：2010年11月11日（木） 14：00～17：00

場所：岸和田土木事務所 泉佐野丘陵緑地工区 会議室

#### 出席委員（敬称略）

大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授 増田昇（委員長）

元読売新聞編集委員 清野博子

大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 准教授 下村泰彦

うみべの森を育てる会 西台幸子

泉佐野市都市整備部 部長 松下義彦

元大阪府立大学大学院 前中久行

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 会長 殿元日出夫

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 副会長 杉本和彦

#### 欠席委員

NPO 法人プラスアーツ代表 永田宏和

泉佐野観光ボランティア協会 吉野勝

大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所（CEL）客員研究員 弘本由香里

大阪大学大学院 工学研究科 教授 澤木昌典

大阪市立大学大学院 工学研究科 准教授 嘉名光市

#### オブザーバー

大輪会 末澤事務局長

#### 次第

- 1 開会
- 2 資料確認・出席者紹介
- 3 現地視察（パークセンター計画地及びコラボレーション区域）
- 4 協議案件
  - 「パークセンターの配置について」
  - 「コラボレーション区域のつくりかた」
- 5 次回開催日程調整
- 6 閉会

#### 協議

パークセンターの配置について

事務局から資料にもとづいて、「パークセンターの配置について」を説明した。

## 主な意見

- ・資料の図面では、屋上緑化を実施する屋根部分が、後庭の屋根付きテラスの屋根で隠れているように見える。屋上緑化を実施する屋根と、屋根付きテラスの屋根との位置関係の整合性はとることが必要である。
- ・芝草を使った屋上緑化は、雑草群落で屋根が埋まる可能性がある。雑草群落で覆われた屋根が似合うようなデザインにするのか、刈り込んだ芝生を維持した屋根のデザインにするのかを決めるため、デザインコンセプトを明確にするべきである。
- ・屋上緑化部分に特定外来種のナルトサワギクが生えた場合は駆除が必要である。
- ・ビジターホールや多目的室の面積など、基本計画レベルで決めておく必要がある。小学校の遠足を受け入れる場合、1学年で120名程度を受け入れることになる。その人数に対応した多目的室、ビジターホールの設計を計画する必要がある。
- ・今回の資料では、景観の検討成果が反映されていない。再度精査が必要である。
- ・オープンテラスと入口との兼ね合いが、建物の外観を考えていく上で最も重要である。
- ・山に溶け込むような自然的なパークセンターなのか、独立して君臨するようなパークセンターなのかによって建物の素材も変わってくる。視点場を複数入れた検討資料、設計のコンセプトを示していただきたい。
- ・パークセンターからの眺望を考えると、計画案のパークセンターの高さで、前面にあまり植栽を施すと堰堤の眺望が見えなくなる。グラウンドレベルを高くするか、眺望台のようなスペースを設けた方が、遠景がより見えるのではないか。
- ・谷口池の堰堤はササユリが生えているので、パークセンターからもササユリが見えるような設計にしていきたい。
- ・屋根付きテラスが建物中で大きな意味を持っているため、スマートで魅力的なデザインにしていきたい。
- ・計画案と参考資料で提示していただいているデザインとでは、テラスのデザインの考え方が大きく異なっている。屋根つきテラスのおさまりを含めて再度検討しないといけない。
- ・パークセンターが計画地の中でも東南に位置している。この位置では、室内からの海への眺望は望めない。室内から海への眺望を見るためには、計画地の中でも北西に位置する必要がある。
- ・バックヤードのスペースについてどのように考えているのか。活動を来園者に見せるのであれば、パークセンター付近が望ましい。
- ・パークセンターからの眺望を優先すると、前庭と後庭の境界に植栽を植えない方がよい。そう考えたとき、前庭と後庭は連続した一体的な空間になる。
- ・伐採した竹材の保管や、作業の準備などを行う作業スペースをどこに確保するか考える必要がある。
- ・後庭の配置に関して、作業スペースを優先するか、眺望を優先するか決める必要がある。また、パークセンターの部屋割りと屋外との関係性、屋根の見え方も検討しなければいけない。
- ・CGや250分の1程度の簡単な模型を作成し、どのように設計すれば一番きれいな形態になるのかスタディをしたい。
- ・屋外とパークセンターの関係性では、ロータリーからの景観と後庭の配置を検討する必要がある。後庭の配置については、南側にもってくるのか、北側にもってきて眺望を確保するか2種類から考える

べきである。

- ・計画案では、南側は全部壁になるようなイメージになっているが、太陽光を冬の暖房として利用するためには、南側の開口部をどのようにするか考える必要がある。
- ・外の空間、屋内の空間と方位、眺望、活動を重ね合わせた基本的なスタディが必要である。
- ・今日出た意見を再整理した上で、次回に基本計画を提案していただきたい。

#### コラボレーション区域の作り方

事務局から資料にもとづいて、「コラボレーション区域の作り方について」を説明した。

#### 主な意見

- ・親水区域の安全対策として、何メートル以上の落差で柵を設置するのかなど、基本的な考え方を固める必要がある。
- ・行政が責任を持って危険度マップを作成する必要がある。
- ・郷の小径は、子ども達にとって貴重な場所である。自然が残せる所は残して、子ども達が森の気持ちよさを体験できるようにしていただきたい。自然を残す場所と整備する場所をみなさんで時間をかけて議論していただきたい。
- ・竹を伐採した跡地を今後どのように修復していくのかを考えていくべきである。
- ・落葉広葉樹林に竹林が侵入し始めている部分がある。その部分の竹を今のうちに伐採すれば、効果的に竹の侵食を防ぐことが可能である。緊急景観対策エリアも確認していただきたい。
- ・パークレンジャーの体力と優先順位を考えた上での伐採計画を早急に作る必要性を強く感じる。どこをどう手をつけていくか具体的に戦略を立て、ゾーニング図を作成するべきである。
- ・伐採作業をした後は必ず伐採した木材を整理し、荒廃感を感じさせない公園整備をするべきである。
- ・竹チップの園路も幅が広すぎる印象であった。できる範囲での最小限の寸法設定が必要である。通路の整備工事で、法面が発生した場合には、すぐに法面の植生再生工事を施すべきである。荒廃感を出さない整備を検討していただきたい。
- ・手作業での整備にも限界があるので、手作業と機械作業のバランスをどのようにとっていくかが重要だと考えている。
- ・自然の森を大切にすることは大事なことだが、公園としての魅力も出さないと来園者が来ないのではないか。自然体験型の公園としての魅力をどのように打ち出すかが問題である。
- ・里山や竹林の侵食を実際に見て「山は生きている」と実感した。子どもたちにもそのようなことを体験してもらうことが、当該公園の魅力となりうるのではないか。
- ・海外の公園では、有料のガイドが案内をしてくれる。この公園も、今後ガイドやプログラムをどのように育成していくかも検討していくべきである。
- ・コラボレーションエリアの中にも、初期整備を業者に委託した後に、ボランティアが手を加えたほうがよいエリアもある。また、モウソウチクが生えているエリアはボランティアだけで整備することは困難である。フレキシブルに対応した整備が求められる。
- ・既存林を間伐したり、枝を整えるだけで公園の風景が大きく変わる。既存木の手入れをボランティアだけに任せるのではなく、どのように既存林の整備を実施するのか検討した上で整備する必要がある。
- ・イノシシとカワウも問題である。害獣として猟友会に駆除してもらうのか、自然の豊かさとしてそのまま残すのか考えていただきたい。

- ・カワウやイノシシの駆除は、泉佐野市の農業施策の担当課と協力し、害獣対策として位置づけるべきである。
- ・ゾーニングについては、現在パークレンジャーが業者の植生調査を見学したり、自分たちで勉強しながら調査を進めている状態である。緊急性のある植生管理も踏まえて、将来的な方向性を決めていきたいと考えている。
- ・当該公園のゾーニングでは、手をつける部分を決めるゾーニングが求められる。他の部分は「未検討」ということが記入されたゾーニングが必要になる。全部の完成像を描こうとするのは無理がある。
- ・PDCA サイクルを何度も繰り返しながら、整備を進めていく必要がある。そのためには、作業のデータの蓄積が必要である。どれぐらいの作業量でどの程度の整備が可能かがわかれば、経年的にどのような管理をしていけばよいのか見えてくる。
- ・コラボレーション区域の作り方の資料の中に、「植生（自然度）」という用語がある。この用語は環境省が決めている厳格な基準がある。当該公園の場合はその基準にこだわる必要はない。